

会議全般を通じ喜ばしく感じたことは、外国人学者の発表の中で日本人の研究の引用が多くなったことである。また筆者が所属している第42委員会(測光連星)の Organizing Committee のメンバーから将来日本でのワークショップ開催の可能性についても質問されたことを付記しておきたい。発表された全論文は近く D. Reidel 社からの雑誌 *Astrophysics and Space Science* の特集号として出版される予定である。

最後に1つエピソードを紹介しておこう。会議期間は8月のチェッコ事件のあった後だけに東欧からの参加者が初めの予定より少なかったのが目立った。会議の中1日、隣接したユーゴスラビアの鐘乳洞への見学が行われた。会議参加者の中にユーゴーのピザを取っていない者がかなりあったが、一同バスで出発した。国境で、これ等の人々は殆ど入国を許されたが東欧からの人々は拒

否された。但し、チェッコからの参加者のみは入国を許された。トリエステ会議の最後の日、台長 Hack 夫妻主催の晩餐会があり、新来、遠来の参加者約40名が招待されたが、その席上チェッコのP氏が立って、ユーゴーのピザを持っていなかったにも拘らず自分等が見学に参加できたことを感謝し、ユーゴーとの国境では、警備隊長から「貴方の見学を心から歓迎する。もし貴方がユーゴーに滞在したいなら我々はどうなサポートも惜しまない。」と言われたと。さらに「スラビック語では一寸発音をずらすとサポートという言葉はひっぱたくという意味の言葉になる。」と。イタリアの Fracastro すかさず立って「我々の学問の間には国境はない。唯あるのはフレンドシップのみ。」と続け、彼をハンガリーからの Detre と握手させながらやかに会議を終らせ一同に強い印象を与えた。

新刊紹介

ルーブリーフ式天体写真集 藤波重次編著

(共立出版株式会社発行、B4判、187頁、定価 3,300円)

著者の藤波氏は昨年星座写真集を発表され、私はそれについて本誌で紹介したことがあった(天文月報60巻9号)。非常に独創的な写真集であると考えたが、本書はそのような力作の写真を展示、観賞の便を考え、写真をB4判に大型化し、学校教育、書齋での研究、観賞に一段と役立たせようと、全体をルーブリーフ式ファイル製本にしたものである。写真は単に前著のもの引きのばしばかりではなく、写野の関係で1駒の写真では無理な広さの場合には、2枚の写真をつぎ合わせて、一層星座の特性を明確にし、また星座の美観を一層引き立たせるように工夫されたものも多い。

巻頭に口絵として周極、赤道、南方の星座の運動がカラー写真で示されていることは本書の使命に照し、時宜を得た企画であろう。本文中でも、オリオン座、プレアデス諸星のスペクトル、池谷・関慧星がカラー写真で示されている。

天文学の愛好者、そして日本中の学校が1冊を備えつけられるよう希望しつつ紹介する次第である。(広瀬)

フラムスチード天球図譜 恒星社編

(恒星社厚生閣発行、A4判、232頁、定価 2,500円)

1675年創立されたグリニッジ天文台の初代台長である J. フラムスチードが著した天球図譜の翻刻版である。初版は1729年ロンドンで刊行されたが、本書は1776年に第2版としてバリーで刊行されたものを原本としている。原著は見開き27面の星図から成っているが、本書はバリー版で追加された南天星図、主要恒星配置図を含む30面で構成されている。この星図を最も有名にしているのは、歴史画の大家 J. ソーンヒル卿が各星座に対してギリシヤ神話に因んだ絵図を配していることである。この美しい図譜は各所によく引用されているからすでに御承知の方も多いと思うが、これによってわれわれはバビロン、エジプト、ギリシヤと伝えられた古代人の創造力の華麗さと奔放さに接することができる。この星図を傍にして星座遍歴を試みられれば興味は一しおであろう。

なお本書は全巻上質のアート紙を用い、図版の印刷は甚だ鮮明で美しい。また巻末に藪内清、野尻抱影、木村精二の各氏による「フラムスチードと現代の星座」「フラムスチード星図の史的地位」「フラムスチードとグリニッジ天文台」と題する解説があるが、いずれも独立した論文としても読者の感興をそそる名文である。(竹内)

昭和43年12月20日

印刷発行

定価 125 円

編集兼発行人 東京都三鷹市東京天文台内
印刷所 東京都文京区水道2-7-5
発行所 東京都三鷹市東京天文台内
電話武蔵野 45局 (0422-45) 1959

広瀬 秀雄
啓文堂松本印刷
社団法人日本天文学会
振替口座東京 13595